

〔巻頭言〕

変化する環境への対応は

全農家畜衛生研究所 大 角 貴 幸

新型コロナウイルスによる感染者の発生，緊急事態宣言，まん延防止措置への対応等，ここ2年めまぐるしく変わる状況にふりまわされながらの生活が続いております。

数年前まではパソコンやスマホの画面に向かって会話することが日常となるとは想像もできませんでした，日常の社会生活においてもwebでの会話が当たり前となり，関連する学会，研究会等についても対面式からwebでの開催へシフトしています。

さらに年末からは新規流行株「オミクロン株」の話題一色となっています。この原稿を作成している段階でも日々国内での感染者数が以前の流行時とは比較にならないスピードで増加しています。

診断方法，ワクチンの開発とこれら対策ツールも尋常ではない速さで準備されていますが，感染症との闘いはやはり時間がかかりそうな気配です。

農場への訪問に関しても，ダウンタイムを設定して入場するだけでなく新型コロナへの対応も考慮しないとイケない状況です。農場に関係する人間として，当面は手探りが続くと思っております。

しかしながら，このような難しい環境の中でこそ，新しい技術が生まれ，積極的に活用できるの

ではないでしょうか。

まずデジタル機器を活用した農場作業のリアルタイムでの可視化があげられます。

日常作業の可視化にとどまらず，畜舎環境，豚の健康状態も可視化できることが理想です。

養豚場ではあまりイメージできませんが，敷地が広い場合はドローンの活用もあるかもしれません。

デジタル技術が以前に比べ使い易い環境になり，先進的な取り組み事例も始まっています。養豚場においても防疫管理，飼養衛生管理基準を守りつつ，従来の管理法にデジタルツールを加えることで生産性の向上がはかれるか，試行する時期にきていると考えます。

さて，豚熱発生状況についても述べさせていただきます。

2021年12月には北は東北地方，西は中国地方まで養豚場での豚熱ワクチン接種地域が拡大し，養豚場ではのべ73事例の発生が報告され，野生イノシシからの豚熱検出は北は宮城県，山形県まで，西は兵庫県まで拡大しています。

SPF農場においては日本SPF豚協会の認定基準にもとづきハード，ソフト面の管理を行っています。今一度それら内容に漏れがないか，「農場に病気を持ち込まない」ため特に農場内外を区分

するフェンスや車両、資材、人等の出入り、野生動物侵入対策の再確認をお願いします。

車両、人、資材等出入り際には消毒を実施していると思います。動力噴霧、ふみこみ槽、くん蒸など方法は様々ですが、使用薬剤の濃度が所定の設定どおり維持されているか、交換頻度が守られているかを確認してください。

また、野生動物侵入対策ではフェンスの保守点

検の他、敷地内の整理整頓、定期的な除草とあわせ、畜舎の破損部分の都度の補修も行ってください。

根本的には農場、畜舎への侵入経路の把握、対策が必要かもしれません。将来養豚場において畜舎内外の野生動物の動向が把握でき、それにもとづく対策がとれるシステムが開発されることを切に願っています。